



緑爽会報 NO.120
 '13年 7月25日
 発行
 公益社団法人
 日本山岳会 緑爽会
 ☎ 03-3261-4433
 事務局 松本恒廣
 夏原寿一 近藤雅幸
 近藤 緑 川口 章子
 渡部 温子 福原 好子

2013年自然保護全国集会

立山で開催

13年の自然保護全国集会是、富山支部との共催で、7月6日～7日の2日間、立山の「立山国際ホテル」で開催された。

1日目は、午後から支部報告からスタートした。今年も、北は北海道支部から、南は北九州支部まで、22支部の方が参加、14支部から報告があった。



全国集会场風景 撮影・富澤克禮

に学ぶ」をテーマにした全国集会の幕が上がった。節田副会長の挨拶、来賓の立山町長、富山市長(代理)の挨拶、来賓の紹介に続き、基調講演「立山連峰の積雪と氷河」(飯田肇氏)、「弥陀ヶ原自然と歴史の今昔」(佐藤武彦氏)に入った。両講演とも、実際に現場で直接携わっている方の話のため、大変興味深く、人を引き付けるものであった。

グループ討議は、①湿原の自然と保護、②ライチョウの生態と保護、③信仰登山について、④持続可能な自然環境の管理について、の4つのテーマに分かれての討議が行われた。①のテーマへの参加者が多かったため、グループを2つに分けたため、5グループでの討議となった。1時間半の熱心な討議の結果を、各グループの代表者が発表して、集会是、盛会の裡に無事終了した。

支部報告、メイン集会を通して感じたことは、盛り沢山で時間がなく、質疑応答が全くなかったことが残念であった。

懇親会は、ホテルの和室で、19時から開始された。新任の山田自然保護担当理事挨拶でスタート、山田富山支部長の乾杯の発声で宴席に入った。和気藹々の素晴らしい雰囲気の中で久しぶりの再会を喜ぶ姿があちこちにみられた。会は、今回の全国集会を共催した富山支部の川田副支部長の中締めでお開きとなった。漏れ聞こえるところによると、懇親の輪は、その後の二次会にも引き継がれ遅くまで盛り上がったとのことである。

富士山ごみ対策強化を

第28回国文祭「富士の国やまなし国文祭」夏のステーションの「やまなし発見フォーラム」が6日、富士吉田・富士五湖文化センターのふじさんホールで開かれた。世界文化遺産に登録された富士山について、アルビニストの野口健さんらが、ごみ投棄への対策を強化する必要性を訴えた。

野口さんは「富士山から日本を変えよう富士山・今後の期待と課題」と題して講演。「富士山が世界文化遺産に登録されて喜ぶだけではいけない。山梨・静岡両県の担当者は富士山にこもり、ごみ問題などを目を焼き付け、対策を講じるべきだ」と訴えた。

パネルディスカッションでは、県立文学館館長の近藤信行さん

富士吉田で国文祭フォーラム



パネルディスカッションで意見を交わす(左から)高階秀爾さん、石田千尋さん、覚和歌子さん、C.W.ニコルさん
 富士吉田・富士五湖文化センター

野口健さんやニコルさん訴え

がコーディネーターを務め、大原美術館長の高階秀爾さん、山梨英和大教授の石田千尋さん、詩人で作詞家の覚和歌子さん、山梨出身、作家のC.W.ニコルさんが富士山の魅力や今後の課題について意見交換した。

ニコルさんは「ごみ問題と、国立公園の山岳レンジャーが世界的にみて圧倒的に少ないことについては、特に考えていかなければいけない」と指摘。山梨、静岡両県が今夏に徴収を試行する入山料については「僕は自然を守るために払う」と理解を示した。

会場ではこのほか、山ガールファッションショーや富士山に関する雑学王選手権なども行われた。

〈派登雄太〉

翌日のワールド・スタディは、生憎の天気。行き先変更が相次ぐ中、かなりの人が予定どおり、①室堂コース、②弥陀ヶ原コース、③博物館等見学コースに出発した。

悪天候にも係わらず、現地を熟知した富山支部の方の案内で、参加者は充分満足したようだ。

各コースとも、現地解散で家路についていた。

今回の自然保護全国集会是、参加者も、17名に及び盛会の裡に無事終了できましたのは、富山支部の山田支部長を始めとした支部員の皆様、特に金尾事務局局長様の献身的なお力添えのお陰と、この場を借りてお礼申し上げます。

(自然保護委員・富澤克禮)

富士山世界文化遺産認定

富士山の世界遺産入りがようやく決まった。山梨支部が恒例の「山の博覧会」(6月29日開催)で富士山特集をしたのに続いて、7月

6日県主催の記念シンポジウムが富士吉田市で開かれた。文化遺産ということで、話は日本人と富士山との係わり全般に及んだが、気になるのは今後のこと。遺産効果とやらで富士山は空前の登山ブームに沸いている。浮かれてはいられない。対策が急がれる。(K)

[緑爽会9月山行のお知らせ]

野猿峠から大塚山と七国山

日時 9月28日(土)日帰り
 集合 京王線長沼駅改札口に午前9時
 コース 長沼駅—長沼公園—野猿峠—大塚山—七国山—JR横浜線原原駅 約4時間
 絹の道から鎌倉古道をつないで歩く緑も多く、展望もよいコース。七国山で昼食になるでしょう。弁当・飲み物は十分にお持ちください。靴は履きなれたものであればOKです。
 係 横山隆 03-3704-1687
 参加される方は前夜迄に留守電にご連絡を。

親愛なる各位

拜啓 異常な寒さが続いたと思っていたら、突然の真夏並み暑さに驚いています。

再入院以降の体調衰微を謙虚に自覚し、かつて梅干の種を噛み割った自慢の歯がポロポロ抜けた上、近々の白内障手術も控えており、文字通りの満身創痍のこの身に呆れております。

さらに、10余年前の大転落の後遺症で足腰も不満足。それでも歌だけは次々と湧き出すのが不思議。これなら健忘症進行は減速かと密かに安堵するとともに歌神が取り憑いたかといぶかっています。

実は、日々の「身辺雑詠」から、福島の原発問題が中心になりつつある東日本大震災を詠題とした「震災詠」とこの「ガン・ファイト」を別に纏めているのですが、健忘症が本格化する前に纏めきれぬか焦っている状態です。手術から5年経てば完治だそうなので「ガン・ファイト」も続きます。

ともあれ、順序が前後しますが再入院編に続き「癌発見・抗癌剤点滴入院編」をお届けしますのでご照覧の上、ご感想を頂戴できれば元氣になれると信じています。満身創痍ながらも、これからの新しい治療体験を楽しみつつ百歳まで生きるつもりで皆様の健康を心からお祈り申し上げます。敬具

狂歌師 翠柏山人

ガン・ファイト（発見・抗癌剤点滴等入院編）中野総合病院入院（3号外科病棟）

期間 第2回 2012年7月12〜20日 9日間 第3回 同7月30〜8月8日 10日間

6月

・鼻孔からカメラ差し込み胃の検査潰瘍大きく要切開と（6/18 竹下医院）

・以前から自覚症状ありしかど手術要すに少し動揺

・家系には癌は皆無と思いに何の因果か腹を開くと（19中野総合病院大野玲外科部長診断）

・胃袋と大腸検査も無事に済み切腹の日を決めて待つのみ（22 内視鏡検査）

・入院は月を越してと思いに医師の言うまま直ぐ病床へ（27 中野総合病院入院）

・取り敢えず抗癌剤で縮小し様子見たうえ執刀すると（主治医・大野玲外科部長）

・点滴の管に繋がれ真夜中の廊下をソロリ歩む吾が身よ

・身体の異常を自覚した時は直ぐに精密検査をと知る

・吾が病むを知りたる妻は何となく少し優しくなった気がする

・白々と病窓明けゆく午前四時嘴太鳥の鳴き声届く（29）

・よく聴けば未明の鳴き声物哀し群れぬ鳥は孤独なりしや

・同室の老爺は難聴口もどろ時々呻く理解不能事

・真夜中の廊下摺り足急ぎ足シオンベン洩れるな漏らすなシオンベン（30）

7月

・雨深夜緊急自動車駆け行けば睡眠破れ苦しむ病臥（1 中野総合病院）

・束の間に病み萎瘦せた筋肉に山を駆けたる若き日想（3）



・吾が余生癌には断じて渡さぬと脳裏に浮かぶ若き日の山
『屋久島を巡る回想とわが死生観』として別に前2首の他に以下2首を含む約20首あり（別途編集済み）

・世の常とやがて去りゆく命から孫子に伝えむ確かな未来

・哀しむな惜しむな吾が死吾が願望は大地に帰る宇宙の微塵（06・9・9 久保田の計報に接し少し早い辞世）

・重症の患者にや辛い待ち時間これが現実大病院は（11）

・昨日より体調少し戻れども全身虚脱の症状続く（12 一時退院の自宅）

・救急車搭乗するは三度目か全身虚脱で再の入院（12夜 救急車で再入院）

・吾の身を案じながらも帰る妻また来てくれと願いつ送る

・切れ目なき夜間救急搬入に医療チームの八面六臂

・先見えぬ非難で悩むフクシマの人思い遣る検査待つ間も

・気が付けば吾が運ばれし病室は五日に退いた隣室なりき（13）

・一時間ごとにぼっかり目覚むるもその間に熟睡できた幸せ（14）

・娘らが勤め帰りにきてくれて四方山話も嬉し一時

・尿袋外して廁へ歩みゆき宿便排出気分爽快（輸血中挿入の尿管からの解放）

・脱糞を試みれども二三日絶食続けば出る物も無し（15）

・廁から戻れば同室患者あり盲腸炎の緊急手術と（16 小池青年）

・病床に在るとも森羅万象は目を逸らすこと吾に許さず

・どうせなら早く切つてと願う吾に滅多に居ない患者と主治医（17）

・騙されたつもりで再度抗癌剤治療せぬかと主治医の勧め

・乗った舟いまさら降りるも見苦しい五日間ならやると応諾

・病床は六人部屋に移りけり窓に近寄り明るくなりぬ

・六人の同居房でも会話なく各々繭に籠れる如し

・病床で寝ているだけじゃ分らねど戸外は焦熱地獄なるらし（伊勢崎でMAX39℃超）

・ページ繰るとに感動新発見金子みすずの童謡文庫（19）

・取り敢えず点滴終えて針を抜き拘束解けて身軽になりき（19 夕刻）

・点滴を終えて身軽になりたるも廁通いの頻度変らず（20）

・隣床の患者は軒止まざるもラジオ鳴らして気を紛らわせり（20未明）

・ともかくも暫し小康保てると主治医の許可で一時退院（20 午前）



カット・中村好至画

「秋のシンポジウムのために」

ローゼさんと「北越雪譜」

越後支部 吉田 理一

平成二四年一二月、日本山岳会越後支部機関誌「越後山岳」第二二号に「北越雪譜 独語版・英語版の研究」という一文を載せていただきました。私の予想をはるかに上回る反響がありこちらが驚いています。札幌の芳賀孝郎元副会長からは高橋健治に関する京都大学学士山岳会の機関紙のバックナンバーを送っていただいたり、元毎日新聞編集委員の斎藤清明さんから、出典に関する疑問点やローゼさんの一人娘エリザベスさんの情報を寄せていただきました。

さらに緑爽会秋のシンポジウムで高橋健治・ローゼ夫妻をテーマにとりあげるとのお話までいただきました。

ローゼさんを知りたいきさつ

北越雪譜の著者鈴木牧之は新潟県塩沢（現南魚沼市）の縮閣屋の主人、私の勤務先から一五分の所に鈴木牧之記念館があります。しかし山に関する記述は文化八年（一八一一年）の苗場山登山くらいで他は雪国の生活・文化の紹介が大部分であり、元々雪国育ちの私にはわざわざ見に行く気にもなりませんでした。

平成二四年八月、「フォーラムイン安曇野・小谷」の山田旅館でローゼさんが創始した「モアジョイ」から参加のお二人が紹介されました。今考えるとそのうちのお一人は坪井靖子さんでした。資料として斎藤清明さんの「一月二日死去 古きよき日本の理解者」と題する新聞記事が配付されました。この中でローゼさんの日本における活動が要約されてい



若き日のローゼ・レッサさん

て、北越雪譜に独語版・英語版があることを知り、翻訳したのはローゼさんという名前の女性だと初めて分かりました。

その後もローゼさんに関する新聞記事等の資料は見つける度にファイルしておきました。私が不思議に思っていたのは①「二才のペルリン娘が一人で遙か彼方の「未知の国日本」へ来る気になった理由。②「北越雪譜」を独語訳するのに四〇年の月日がかかっているがこの熱意を継続させたのは一体何か、の二点でした。

疑問点の急展開

平成二三年一月一日新潟日報視点欄に「四〇年かけ『北越雪譜』翻訳・ローゼさんの生涯」と題する一文が掲載されました。編集委員森澤真理さんによる記事でした。この中で昭和四年に來日した動機について触れていました。

ラファディオ・ハーンが描く「不思議の国日本」にあこがれての渡航であったとのことでした。調べた他の資料では「伝説の国日本へ」と記されていました。

森澤さんにローゼさんに関する資料を問い合わせたところ何点かの貴重な情報を教えていただきました。その中に独語の自伝があるのでそれを読めば来日の経緯が分かるのでは、

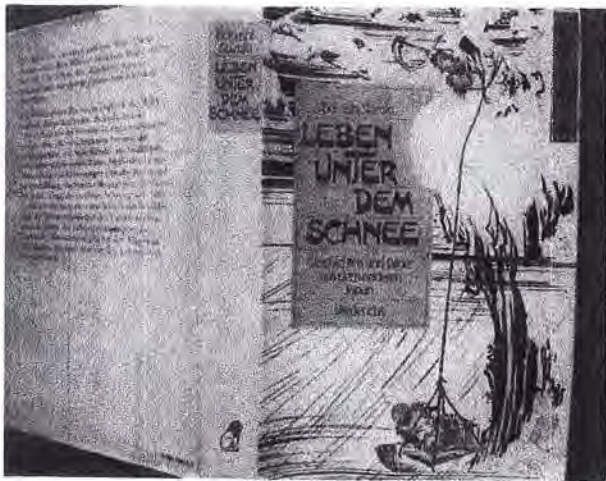
とアドバイスしていただきました。
私は独語も英語も全く分かりませんのでネットで調べたところ、平成元年当時ローゼさんから独語を習っていたという山田昭彦さんがこの自伝の要約を載せているブログ「ローゼ・レッサ・インジャパン」が見つかりました。このブログにより沢山の意外な事実を知ることが出来ました。

来日の動機

当時のドイツは第一次世界大戦の敗戦による悲惨さと不況から若者の間には厭世観が漂い、どこか遠くの素材で良心的な場所に憧れを抱いていた。「日本は未知の小さな島国で、国際政治とは無縁で純粋で自然に満ちた人々が暮らしている。」と当時のヨーロッパの人々は想像していました。戦争も不況も無い国・日本に移ることはとても魅力的な事だったようです。（山田昭彦さんのブログから引用）

岩波文庫「北越雪譜」

一年の半分近くを雪に覆われる越後の豪雪



ローゼさんが訳した『北越雪譜』独語版

地帯の人々の生活を知り「雪の下に正直で、温かな人々の、本当の生活を見た」、「雪国の人達の生活と心情を世界に紹介しなければ」と心に誓う。何度も足を運び、数週間あるいは一カ月以上も逗留する中で、新潟県湯沢町のスキーロッジ経営・嶋村勝彦氏、ホテル経営・高橋半左エ門氏らと親しくなる。

昭和十一年、夫と共に訪れた新潟県湯沢町の旅館の囲炉裏端で一冊の文庫本「北越雪譜」を手渡された。ローゼさんが描こうとしていた直接見た雪国の生活がそこに凝縮されていた、外国の影響を受ける以前の日本の姿でもあった。（毎日新聞 平成元年一二月一日「ひと」今吉賢一郎記より引用）
高橋半左エ門氏はエッセイ集の「苗場山和田小屋和田千代女聞き書帖」で次のように記している。

千代く昭和一四・五年だったろうか外国の女性は体格のいい人で「和田ヒュッテ日本一、ジサマ日本一」と挨拶するの面白いなだと思いました。夜寝るとき旦那さんと一つの大きい寝袋の中に入ってコトコトと抱かれていますので不思議に思ったテ、ハ、ハ、ハ。私達が和田ヒュッテにいる間中吹雪いていたので、高橋健治先生は降りましようと言って湯沢へ帰った。

日本一の山スキーの先生に神楽峰まで登って貰えなかったことは痛恨事であったが、和田ヒュッテに三日も滞在して引き返したことはやはり日本一の安全登山であったと思う。

同集「半左エ門よもやま話」くローゼ夫人が何処の山麓の部落へ行っても、古者からその風習や昔からのしきたりや行事を聞き出してノートしている

ので、私は「岩波文庫の北越雪譜」にサインして贈呈した。

(四〇年後の)昭和五二年、ローゼさんが嶋村氏と二人で訪ねて来た。ローゼさんは私の贈った、北越雪譜の本を出して、「私は健治に死なれてから途方にくれ、また戦争中は外国人ということで白眼視されて幾度も自殺を思い立ちました。しかし私はこの北越雪譜をドイツ語に翻訳しようと思ひ立ち、一生懸命翻訳し続けて今日まで生きて来ました。この本を下さったあなたに感謝します」と言われた。

同集「あとがき」に私に悔いのない人生を送らせて下さった、スキの故高橋健治先生、山の故深田久弥先生、それからエベレスト登山隊長をつとめた先輩の渡辺兵力氏に感謝の念を禁じ得ません。

(この項 越後山岳第一二号から引用)

緑爽会報一一五号(本年二月号)から

坪井靖子さんのローゼさんに関する記事は驚くことと連続でした。日本人にも難解な北越雪譜を四〇年かけて独語に翻訳したことだけでも大変な偉業と思っていました、しかしそれはローゼさんの業績の氷山の一角である



ローゼさんが自著の扉に書いた献辞

事を知りました。

本年五月二五日、越後支部総会が新潟県阿賀町御神楽岳山麓で開催された際、越後支部委員本間一人さん(写真家)から、坪井さんの文中に出てくる白鳥の湖の写真家本田清さんが私の研究をご覧になり越後山岳第一二号を求められたこと。またローゼさんの秘書が秋の講演会に向けて取材に訪れたことなどを教えていただきました。秘書とは「伊中清子」さんか、秋の講演会とは緑爽会のシンポジウムの事は不明でした。

執筆を終えて

研究に際しお世話になった山田昭彦さんのブログに次のような感想が述べられていました。「翻訳に没頭することで、戦後の苦しい時代、「主人を病で亡くした悲しい時代をローゼさんは生き抜くことができたことを知りました。わたしが師事したころのローゼさんは、主人

のこと、戦後の辛い話は全くしませんが、それは胸にしまっておくというよりも、昇華したのではないかと、いまは思っております。」

緑爽会高辻謙輔さん(越後山岳第一二号編集委員)からドキュメンタリー小説「雪と湯の宿」(昭和六〇年恒文社刊)を紹介していただきました。ローゼさんに北越雪譜を差し上げ署名を求められた時の様子が詳細に記されています。著者の高橋有恒さんは高橋半左右衛門さんの実弟、期日は昭和十一年三月一日、日夜遅く、場所は湯沢「高半」の囲炉裏端。

岩波文庫版の初版は昭和十一年一月一日。上越線清水トンネルの開通は昭和六年である。発売僅か二ヶ月後に岩波文庫の新刊が雪深い湯沢にあるとは、「高半」の知的水準の高さに驚くばかりでした。(緑爽会々員)★写真上はローゼさんのサイン(田村典子撮影)他の写真は筆者提供。

故川上進さんのこと

樋口公臣

七月に三水会事務担当者より、川上進さん逝去の連絡を受けました。六月二日の留守電に川上さんのかすれた声で、入院すると連絡がありました。

彼との付き合いは長く、昭和三十年代中央区にあった社会人山岳会が出合いです。当時は川上さんが二人居り、年長者が川上光久さんで、その後日本山岳会三水会で活躍しました。川上進さんは当時大田区で製菓業を営んでいましたので、別称あんこ屋と呼び、川上光久さんは印刷屋の川上さんとか晩年は隠居さんと呼んで区別しました。

聖山岳会が解散した時、私たちは会長(川上光久さん)の紹介で一九八九年日本山岳会に入会し、少し後れて川上進さんも入会して

―後記にかえて― ★私ごとだが、勝沼に本

小屋を建てて30年近くなる。甲府盆地は暑くても、大菩薩連嶺に近いわが家は標高が高いから過ごしやすいくらいだ。それが、今年初めて甲州市が39度を超え、日本一暑いと報道された。特産のブドウ栽培にも影響が出るのではないかと心配している。★富士山の世界文化遺産登録を機に、一念発起して武田泰淳『富士』を読むことにした。河口湖の別荘で書かれたこの長編は、武田泰淳の代表作といわれながら難解でこれまで読み通すことができなかった。百合子夫人が綴った『富士日記』のほうは楽しく読めたのに。書き出しの別荘の庭でリスに餌をやっている人間はなぜリスを可愛がり、ネズミを殺すのかと考えることから始まって、そこから先は哲学論議になってくる。戦時下の富士山麓の精神病院を舞台に展開する物語は、読み進む

きました。共に三水会に所属したのですが、彼は三水会の若手の人たちとは性格的に合わなかったらしく、緑爽会にシフトしたように思います。若い頃から自営業だった彼は、人に使われることがなかったためか人付き合いも片寄っていて、とかく敬遠されることが多かったように思われます。それでも毎年九月に上高地の山研で行われる三水会の「あんこ」と薬湯の集い」では彼が持参するお汁粉が出席者に喜ばれていました。もう食べられなくなって残念なことです。



一九三〇年生れの彼は今年八十三歳で、最近体調が悪かったため緑爽会にも欠席が多かったようでした。 合掌 (三水会元事務局長)

うちに患者も医者も看護人も誰が狂人か、誰が正常か、まさに混沌池としてくる。それでも投げ出すことなく読み終えたのは、私が年を取ったからかもしれない。この作品には、作者の戦中戦後の体験が全て込められているように思える。登場する院長も二セ宮様もマリア願望の女も無政府状態の暴動も、現実には思い当ることがある。例えば作家の戦時中の中国での体験、戦後の安保闘争や三島由紀夫事件、百合子夫人との結婚のいきさつなど。私はこの作品を『富士山曼陀羅』とでも言いたい気がしてきました。★川上進さんが亡くなった。自然保護全国集会にはいつも参加して下さった。忘年会定番メニューの煮豆も有り難かった。どうか安らかに眠りください。★8・9月は合併号になります。皆さまお元気で猛暑を乗り切ってください。なお、横山さん担当の9月山行をお忘れなく。(近藤緑)